

2017年11月5日 主日礼拝 礼拝説教(要旨)

聖書 ルカによる福音書 22章 54～62節

説教「ペトロの否認」

日本キリスト教会鶴見教会 牧師 高松牧人

初春の深夜、山の上にあるエルサレムは相当に冷え込んでいたことでしょう。大祭司の家の庭には火がたかれ、人びとは火のまわりで、今起こったばかりの事件について、興奮気味に話していました。ペトロは、主イエスの連れて行かれる後を追って、中庭に集まる人々の中に紛れこんでいました。ペトロはなお主イエスの後に従って行こうとしていたのです。

ところが、思いがけないところからペトロはくずれはじめます。一人の女中が、ペトロがたき火に照らされて座っているのを目にして、じっと見つめ、「この人も一緒にいました」と言ったのです。ペトロはすぐにそれを打ち消し、「わたしはあの人を知らない」と言います。彼はちょうど顔のまわりを飛ぶ不快な虫を追い払うように彼女を追い払おうとしたのではないのでしょうか。ところが、少したってから、ほかの人がペトロを見て「お前もあの連中の仲間だ」と言いだし、ペトロは「いや、そうではない」と答えます。直訳すると「私は違う」という言い方です。さらにそれから一時間ほどたって、また別の人が、「確かにこの人も一緒だった。ガリラヤの者だから」と言い張ったのです。ペトロの言葉遣いにガリラヤなまりがあったからでしょう。だが、ペトロは「あなたの言うことは分からない」と言ったのです。「知らない」「私は違う」「何のことか分からない」、問い詰められ、分が悪くなると、私たちもよくこのような言い逃れを口にします。ひたすら主イエスの後姿を見つめ続けてここまでやってきたペトロでしたが、いつしか人々の目を恐れ、人々の視線を振り払おうと必死になっていたのです。

いざとなったら、全力を振り絞って戦うつもりだったのかも知れませんが、いざという時が来ないうちに、ペトロは主イエスを知らないと繰り返してしまっていたのです。これは他人事ではなく、私たちも身につまされることではないのでしょうか。キリストを否認することは、何も大げさな舞台においてではなく、ごく日常的な場面で起こるのです。職場や学校や家庭や親しい者同士の交わりの中で、キリスト者であることを隠してしまうことによっても起こるのです。周りの人々に合わせているうちに、人々の視線のとりこになり、キリストを見失い、自分をも見失ってしまうのです。

ペトロを我に返らせたのは、三度目に「あなたの言うことは分からない」と言ったときに聞こえてきた鶏の鳴き声であり、主イエスが振り向いて見つめられたまなざしでした。そのときペトロは「今日、鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」と主が言われた言葉を思い出したのです。つい数時間前、最後の晩餐の席で語られたことです。主イエスがそんなことを言われたのは、ペトロにとっては不可解であり、不愉快だったことでしょう。けれども、そのとおりのことが今まさに自分の身に起こってしまったのです。そのことに初めて気づかされたのです。

突然鶏が鳴き、主は振り向いてペトロを見つめられました。実は、ペトロが否認する場面はどの福音書も記しているのですが、ルカによる福音書だけが、この場面に主イエスを登場させ、その主のまなざしを受けて、ペトロは主の語られた言葉を思いだしたと書いています。

では、振り向いてペトロを見つめられた主イエスのまなざしはどのようなものであり、何を語っていたのでしょうか。そのまなざしは、単なる憐みや、そら見たことかという叱責だったのでしょうか。そうではないと思います。それは、今まさにサタンにふるわれて、ひとたまりもなく信仰を失い、恐れの中で主イエスとの関係を断ち切ってしまった者を、なお見捨てることなく顧み、祈っておられるまなざしではなかったでしょうか。主イエスは、ペトロが三度否認することになるとの予告に先だって、次のような言葉を語っておられました。「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけてを神に願って聞き入れられた。しかし、わたしはあなたがたのために、信仰がなくならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい」(22：31～32)。ペトロは、この主のまなざしを通して、最初は謎のようにしか聞こえなかった主イエスのお言葉を、少しずつ心の中によみがえらせていったに違いありません。

ペトロは外に出て、激しく泣きました。ただし、これでペトロが悔い改め、赦され、立ち直ったと書かれているわけではありません。すぐに中庭に戻って主イエスへの信仰を人々に言い表したわけでもありません。この後、ペテロは姿を消すのです。彼は絶望の中に打ちのめされているのです。

しかし、そんなペトロが真に立ち直ることができるのは、十字架にかかって死なれた主イエスが復活し、ペトロの前にも姿をあらわし、彼を再び招いてくださってからです。その時、ペトロはようやくこの絶望の涙を拭われ、主イエスを信じ、主イエスに従う者として新たに立つことができたのです。

あまりにも惨めな経験でしたが、これら一連の出来事は、主イエスが約束しておられたとおり、ペトロがやがて立ち直って、使徒として新たな出発をするために、どうしても必要なことではなかったかと思います。自分の決意や覚悟によらず、ただキリストの憐れみと恵みによって立っていることを知る者こそが、主と教会の業にお仕えすることができるからです。

私たちが信仰に歩み続けることができるのも、それは私たちの力や決意や覚悟によるものではありません。十字架と復活の主が、私たちのために今もとりなし祈ってくださることによるのです。主のまなざしに支えられているのです。